

いる場合は、前述の風乾と同じく固着が強くなるため行わない。また、乾燥機の効率的な運用のため、処置する収蔵品の厚みは三〇mm程度までが望ましいとされており、冊子の厚みによっては予め分割した上で装置に入れる必要がある。

風乾、真空凍結乾燥法により乾燥させた収蔵品は一で述べた手順で分離する。

三 クリーニング

分離・乾燥後の収蔵品にはクリーニングを行う。クリーニングにおいては、本紙表面に付着した汚れやカビの除去・軽減、粘着テープ等の付着物の除去、本紙繊維内部に沈着した汚れの除去・軽減を行う。

本紙表面のクリーニングは、水や溶剤等の液体を使用しないことからドライ・クリーニングとも呼ばれる。空気清浄機を稼働させたクリーニング・ボックス内で、柔毛の刷毛で汚れを払い吸引機で吸い取っていく(図6)。吸引機は、吸引力を細かく調整できHEPAフィルター(註3)を備えた文化財用のクリーナーを使用する。

漫画分野の作品、特に原画にはセロハンテープ等の粘着テープが付着しているものが多く見られた。粘着テープは経年劣化により本紙の変色・変質をもたらすことと、この後の応急処置(洗浄作業)において妨げとなるため、分離作業の際に容易に剥れなかったものはこの段階で除去した。

本紙繊維内部に沈着した汚れは洗浄で除去もしくは軽減できる。応急処置における洗浄では水道水を用い、洗浄方法は本紙の状態により変更する。これまでに洗浄を行った収蔵

品は鶏卵紙、漫画原画、スケッチ、印刷物等種類は様々であるが、基本的には、画像層、描画層、印字層に耐水性があり紙の強度を保持しているものはトレイに張った水の中に浸漬し洗浄する(図7)。浸漬時間は本紙の紙厚、汚れの程度、季節による水道水の水温にもよるが、一〇から一五分と設定している。洗浄後はエア・ストリーム乾燥法で乾燥させる。

一部のスケッチや印刷物等、画面や支持体の状態により浸漬が危ういと判断された場合は、水面に浮かせた状態を保ち洗浄するか、あるいはスプレーで水を噴霧し吸水紙等に汚れを移しとることで浸漬洗浄の代わりとする。また、画像層に耐水性がない、もしくは支持体が著しく脆弱化している場合にはドライ・クリーニングのみにとどめる。

分離、乾燥、クリーニングの工程を終えた収蔵品は撮影、梱包される(図8、9、10)。冊子類は付与された番号順に撮影し、元通りの順番に重ねて中性紙製の保存箱に収納する。

応急処置が完了した収蔵品には、ガス燻蒸による殺虫・殺カビ処理を実施する。酸化プロピレン・アルゴン混合ガスにより四八時間、ガス濃度一・六から二・〇%未満を保持した状態で密閉燻蒸する。移転前の旧館においては仮設燻蒸庫を設けて行っていたが、今後の燻蒸は当面外部の燻蒸施設で実施する予定である。燻蒸処理後、収蔵品は外部保管庫に輸送される。

以上が現在当館美術館部門で行われている紙作品の応急処置の概要である。この後の本格修復については、後述の事例紹介を参照されたい。

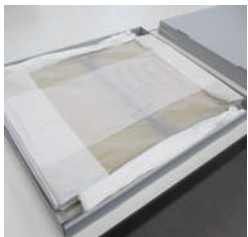


図10 | 梱包



図9 | 撮影

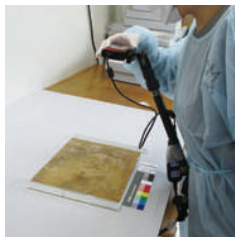


図8 | 撮影



図7 | 浸漬洗浄

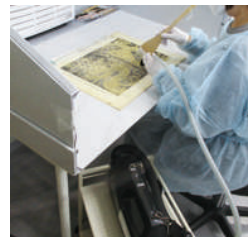


図6 | ドライ・クリーニング



図5 | 真空凍結乾燥機